

連載 名画で読む「骨」の物語

第4回

頭蓋骨は何を語る？

中野京子

作家・ドイツ文学者

人間は何にでも序列をつけたがるようで、かつては絵画芸術までジャンルによって格付けしていた。歴史画（宗教画、神話画を含む）は知的で道徳性も備えたハイアートだとしてトップに置き、次いで肖像画、風俗画、風景画、静物画の順だ。

現代人にはナンセンスに思われるが、アカデミックな世界で出世するには大問題だったし、作品の売買価格にも影響した。そこで下位ジャンルの画家たちは、自作のステイタス・アップのためさまざまな工夫を凝らすようになる。肖像画なら背景に歴史的事件をはめ込み、風景画の場合はたとえ小さくでも神々を描き入れる、というように。

静物画もそうだ。「生きた自然」ではなく「死んだ自然」を扱い、精神ならぬ物品の魅力を描くがゆえに貴からず、と見放されがちなので、逆手を取って物そのものにキリスト教的比喻を散りばめ、中世以来のヴァニタス（＝「虚栄」「人生の虚しさ」「現世の無常」といったテーマ）を前面に押し出すことで、知的かつ道徳的な絵画であることを強調してゆく。

17世紀オランダの画家ステーンウェイクによる『人生のはかなさ』を見てみよう。ヴァニタスという主題の

何たるかが、典型的にあらわれている。

何の素っ気もない木製机の上に、さまざまな品物が無雑作に積み上げられている。画面左の大きな空間と、左から右へ行くに従ってうず高くなる品々、また背景は前者が明るく、後者は暗い。これだけでもう精神性（＝善）と物質性（＝悪）の対比となっている。

右端には大きな水瓶。水は生命になくってはならないものだ。そのすぐ隣には、洋ナシ型の大きく膨らんだリュートが伏せられている。図像的には恋人がこの楽器を奏でる例が多い。さらにその横には、金色に輝く不思議な形のランプ。だが目を凝らすと、火は消えている。煙が一筋うっすらと立ちのぼる。

何冊も重なる書物が、知識や学問のシンボルなのは自明であろう。書物のそばに楽器がもう2つ見える。ショーム（オーボエの原型）とフルートで、これらは感覚の遊びを示すアイテムだ。華やかなピンクのシルクも同様である。このシルクの上には、何と日本刀がある。刀剣といえば、古来、戦士の持ち物で、権威の象徴にして法の執行の象徴だ。柄のわきには、蓋のあいたクロノメーターの懐中時計。まさに時を告げる。左端には美しい貝殻。現世の富のシンボル。